

海外武者修行のすすめとひとり旅の体験（4）

近藤 節夫

13. 戦乱の地へ再びひとり旅

翌年私は再びひとり「戦乱の地」へ旅立った。半年前の1967年6月、僅か6日間のうちにイスラエル軍に完膚なきまでに叩きのめされた第3次中東戦争の影響で、私が訪れたアラブ諸国の緊張は極度に達しており、国内全土にわたって戒厳令や、外出禁止令が布告され神経がピリピリしていた。このひとり旅の渦中に私自身2度も軍隊に身柄を拘束され、そのうち1度は監禁されるという物騒な状況にも追い込まれた。まかり間違えば私の生命が脅かされる危険もあった。

この2度目のひとり旅では24日間に7カ国を巡ったが、前年の経験を生かしそれぞれの国に個人的な関心とテーマを持ち、じっくり時間をかけて訪問国を検討し選択した。このひとり旅でも各地で多くの人たちに助けられ有益で楽しい体験をしたが、人生経験上忘れがたい辛酸も舐めた。また、現地へ行ってから全ての旅行手配を行う私流儀のやり方にこだわったため現地の空気に慣れるまで戸惑うことも多く、往生することも再三ならずあった。

訪れた7ヶ国における私の行動は現地密着主義ではあるが、傍から見ればやや特異で少々過激に写ったに違いない。僭越ではあるが、私の行動は身の危険もあったために誰でもがそう簡単に真似の出来るような体験ではないとは思っているが、身の危険と紙一重の体験を味わったことにより反ってひとときわ臨場感に富む経験もすることが出来た。臨戦現場へ一歩踏み込んだことは現地の実情と本質を知り、冷静な目で生の現実を客観的に分析するチャンスに恵まれたことも事実である。ここでは峻烈な体験記を特にアンマン（ヨルダン）、スエズ運河（現エジプト、当時アラブ連合）、アデン（現イエメン）の3都市（国）に絞り型破りのパフォーマンスを紹介して本稿を締め括りたい。

14. アンマンで軍隊に検束される

アンマン（ヨルダン）市内における軍隊による身柄の拘束は衝撃的だった。ロイヤルヨルダン航空のフォッカー機で中近東の十字路バイルート（レバノン）から入国した翌日、市内で突然身柄を拘束された。アラブの王国ヨルダンは半年前の中東戦争の敗北によりヨルダン川以西をイスラエルに占領され、首都アンマン市内は武装した兵士が至るところ巡回し、道路という道路はヨルダン軍の戦車や装甲車が走り回り緊張感が充満していた。その朝私は市街を見下ろす小高い丘の上で夢中になって写真を撮っている最中に突然十数名

のヨルダン軍兵士にバラバラと周囲を包囲されライフル銃を突きつけられた。映画の1シーンならいざ知らず、自分自身が凶悪犯扱いされたような白日夢に心臓が止まるのではないかと思った。何が何だか分らなかったが暫くして急に恐怖感が襲ってきた。言われもしないのに呆然とホールドアップをしている私に対して、隊長らしき人物が近付き「お前は中国人か？」とライフル銃で私の腰の辺りを小突きながら厳しい顔で尋ね、ボディチェックをして身分証明書の提示を求めた。旅券はホテルに預けさせられていたため、地元民が注視する中を両手を上げたままヨルダン軍兵士にガードされてホテルへ連行された。改めてホテルの総支配人室で隊長以下数名の兵士と総支配人に囲まれ旅券を提示して国籍、職業、入国目的、滞在予定、保証人、所持金、武器不所持、イスラエル入国経歴等の質問に答え、危険人物ではないと判定されて尋問は終わった。隊長はニコリともせずカメラを持ってぶらぶらしないよう散々お説教を繰り返し、漸く私は無罪放免の身となった。身柄の釈放にはほっとしながらもカメラからフィルムを抜かれやしないかと気がかりだったが、案ずることもなかったのはラッキーだった。丁度ホテルへ連行されて来た私と鉢合わせした日本のTV取材陣のひとりから「カメラは気をつけた方がいいですよ。こんなところじゃ殺されたって死体なんか出ませんよ」とトゲを含んだような諭し方をされた。

15. スエズ運河で監禁される

アラブ連合（現エジプト）の首都カイロから運河の都市スエズへ向かう鈍行列車内で車内検札の車掌が突然私になにやらわめきだした。乗車券とエジプトの滞在査証を見せても納得しない。戒厳令が布かれているスエズでは特別にスエズ市内滞在許可書がなければ滞在出来ないとやっているらしい。存在すら知らないそんなものを私が持っているわけがないではないか。それなら最初からカイロ駅で身分を確認して切符を売らなければいいと思う。なんかちぐはぐで間が抜けている。だが、私にとって幸いなことは列車が終着駅スエズまでノンストップだったことだ。こうなったら終点まで行かざるを得ないとほくそ笑んだ。暫くの間車掌と私とのやりとりを見ていた周囲の乗客は珍しい外国人の私に好意を持ってくれ、回りでわいわい囃したててくれたので孤立した車掌は苦々しそうに明日すぐカイロへ戻れと捨て台詞を吐いて立ち去ってしまった。その後スエズまでの数時間は隣の車両からもエジプトの男どもがどやどや入り込んで大騒ぎとなり、私の周囲は大人も子どもも一緒になって日本の童謡から春日八郎、三波春夫まで、またエジプト側から舟唄らしい民謡まで飛び出し、賑々しい車内大歌謡大会となってしまった。地元の人たちと一緒に大いに楽しんだが、終点のスエズ駅でどんな事態が待ちうけているのかを考えればこの盛り上がりは少しやり過ぎたかなあと一寸ばかり反省もした。車窓から見える石油管の赤い炎と砂漠上に破壊されたエジプト軍の戦車の破壊された残骸が印象的だった。だが、広大な砂漠に放ったらかしにされたこの無残な残骸を見て、このていたらくでは強力なイスラエル軍に勝てる筈はないと思った。

迂闊にもスエズ駅では足を踏み外してデッキから滑り落ち、お粗末にも尾てい骨を打ってキスリングを背負ったまま線路上にうずくまっていた。まもなく数人のエジプト軍兵士がやってきて旅券を没収し、私は駅前ホテルの薄暗い無灯火の一室へ監禁されてしまった。暖房設備もなくあまりの冷え込みにジャンパーを着込んだまま横になった。戒厳令が敷かれた状況下のスエズはイスラエル空軍機の攻撃により軍港施設と街はかなり破壊されていた。運河施設は機能不全に陥り破壊された船舶が係留されたままになっていた。街には車も通らず、商店はみなシャッターを下ろし、瓦礫の山でゴーストタウン化していた。老人、子ども、女たちは街から疎開して姿を消し、完全に「男」、「ロバ」、そして「にわとり」だけの街になっていた。翌朝早く私は監禁されていた部屋の裏窓から屋根を伝わってホテルを脱走？して運河まで歩き、閑を持って余し気味のエジプト海軍兵と国際交流を深めた。何食わぬ顔で再び監禁された一室へ戻り、旅券を返してもらった。その日一日ホテルでは私の行動を知らなかった筈がない。見て見ぬふりをしていただろうが、どうもよく分らない。その日の夕刻遅くなって再びカイロへ戻って来た。

16. 入国直前に独立したアデン

英国領アデン（独立直後南イエーメン人民共和国、現イエーメン共和国）では国内に二つの民族解放戦線（FLOSY と NLF）が対立して英国からの独立闘争と同時に執拗に内戦を繰り返していた。私は旅行前からアデンの国情について格別に強い思い込みがあったが、突如独立宣言して東京のイギリス大使館で取得した私の査証は無効となってしまった。エチオピアの首都アジスアベバで得た独立のニュースの真偽も確認出来ないまま「エーイ！ままよ！入国拒否されたらその時点で考えよう」とばかり旧査証で強引に入国することにした。

しかし、アデン空港に到着してみると意外にも査証問題は杞憂に過ぎなかった。思いつめていたが拍子抜けもした。簡単に新国家の入国査証（私が最初の日本人入国者か？）を発行してくれた若い入国係官はやたらに愛想がよく、尋ねもしないのに得意気に「わが国は平和である」とのPRを付け加えるのを忘れなかった。それはそうだろう。昂揚した気持が分らないでもない。宗主国イギリスから独立を勝ち取り、内戦も一応終止符を打ったのだから……。自分たちの手で自分たちの国造りを成し遂げたという誇らしげな顔が輝いて見えた。

アデン市内は一応平静を取り戻していたが、有刺鉄線ががんにがらめで空港からの道路は蛇行しなければ走れないほど荒れていた。空港係官に紹介してもらった市内にある怪獣のような名の3階建ての「ゲジラパレスホテル」にわらじを脱いだ。FLOSYの一員として反英独立闘争にも加わった若いマネージャーのムッタナ君は私に独立前後のアデンの様子について興奮しながら事細かに話してくれた。このホテルも英領時代はアデンの人は立ち入りすることすら禁じられていた。独立後は市民の顔が明るくなったとも言っていた。

フロントの背後の壁面にうっすら黒い影が残っている跡が気になり彼に聞いてみたところ、独立前にはエリザベス英女王の写真が貼ってあり、従業員もかつてはこの写真が気になっていたが今はさっぱりしたと正直に話してくれた。ムッタナ君を始めホテルの全従業員は私が「赤い中国（Red China と言っていた）」からやってきた同盟国（独立以前のアデンは中国と密接な外交関係にあった）の一員だと勝手に誤解して大歓迎してくれた。

市内中心部の昔ながらのマーケットには、生き物は疲れた男と山羊、犬しかいない。生鮮食料品の間にも山羊の糞がコロコロ転がり不衛生で異様な匂いが鼻をつく。女性の姿はほとんど見られない。スエズと違ってここアデンの前面は紺碧の海、後背地は草木一本もない岩山が峰を連ね疎開しようにも疎開するような土地がない。では、「女」性はどこへ行ったのだろうか？私はアジスアベバから紅海の入口・ジブチ（ジブチ共和国、当時は仏領ソマリランド）を經由してプロペラ機で入国したが、ジブチから家族連れが乗り込み、私の隣に若い母親が腰をかけアデンまでの間親しく会話を楽しんでいた。ところが、その母親はアデンが近づくとトイレで頭からすっぽりベールを被った民族衣装に着替え、それからはいくら私が話し掛けても応えてくれず、まるで別人の「女」性になってしまった。夫以外の男性とは口をきいてははならないとのイスラムの戒律が守られていると言えばその通りなのだろう。アデンの空港で彼女と別れるときにも軽く声をかけたが、一顧だにされなかった。ところがこのアデンにも妙な場所に「女」性がいた。専用のアデン市内の地図を作成するべく暑い中を歩き回り小高い岩山を登っていると洞窟を板で目張りした小屋から黒いベールをまとった「女」性らしき人物2人ほどがしきりに手招きしているではないか。あれは多分一種の街娼だろう。えらいところで商売しているもんだと感心した。

17. 現場を見ない日本のジャーナリズム

私のアンマン市内における一時的な身柄の拘束、並びに他の地域における瀬戸際的な行動を聞いたら世の識者からは軽率な行動だとのそしりを受けるかも知れない。確かに厳しい臨戦体制下で生死を賭して戦う兵士を刺激しかねないカメラを持ち歩いたのはやや軽率妄動の行為であったと自戒もしている。しかし、私なりに弁解させてもらえるなら当時の私のひとり旅の行動スタイルはなんのことはない、ほとんどその時代のマスコミ報道から自分なりに理解し、自己流に学んで掴みとったものだった。基本的な行動パターンは全て当時のマスコミの報道姿勢から学んだものなのだ。敢えて反論すればマスコミも国民に対して臨戦体制の厳しさについて事実を正確に伝えることと同時に、ピリピリした臨場感も伝えるべき責任があったのではないだろうか。かれらにしてもジャーナリズムとしての根源的な責任を果たしているとは言えない。そのことは当時の新聞の取材ソースを見れば分る。あの頃の生々しい新聞報道の情報源はみな外国通信社＝「共同通信」配信であり、国内では記者クラブ形式による共通情報入手だったではないか。辛らつに言わせてもらえば日本のジャーナリズムは身を挺して現場を歩いていない。現場を見ていない。行動力にも

欠けている。だから臨場感や切実感が伝わらないのだ。先号紹介したインドネシアの実情にしても私が実感した現実のインドネシアとマスコミが伝える「スカルノ体制下の理想的な現実」像との間には厳然として大きなギャップがあった。現場に足を踏み込めばわかることがなぜマスコミには伝えられないのか。当時のマスコミはぬくぬくと屋内で取材？していた。つまりサボっていたといってもよい。それゆえにこそ自分の足で歩いた小田実が光り、現場に肉薄した開高健、岡村昭彦らが一層輝いて見える。真実の姿は現場で読み取ってこそ生きてくるし、また本物の価値も滲み出てくるものだ。

ひとり旅から帰ってから私は皮相的で‘ジャーナリズム魂’を失ってしまったかのようなマスコミの不勉強な報道姿勢に対して憤りを覚えると同時に、逆にかれらの報道姿勢を「本物」と「にせもの」、「実像」と「虚像」を自分なりに見極める洞察力を身に付けるための反面教師として活用してみようと考えた。

私が個性的な海外武者修行を企画し、実行してみて強く現場における臨場感を意識するようになり、「あるがままの姿」を見抜く智慧や手段、人生や業務上における確信や信念のようなものを曲りなりにも持つことが出来たのは、若かりし頃の海外武者修行で得た最大の収穫であり、武器であると思っている。

18. おわりに

これまで4回にわたり駄弁を弄してきた「海外武者修行のすすめ」の主旨は、拙い小論「体験的人材育成論」をベースにしており、若い人たちに感受性と吸収力が豊かなうちにとかくひとりで海外武者修行に出かけなさいと強く勧めるものである。

若い人たちにはぜひ積極的にテーマを持って未知の国を訪れ、いろいろな人々と触れ合い、多種多様な文化と文明を感覚的に知って欲しい。そしてぜひ臨場感を掴んで欲しい。それが人の器を大きく育てることになる。

社会が複雑に、かつ多様化してくると社会の実態と虚構を見抜く洞察力が鈍くなり、曖昧になってくる。その洞察力を感性によって磨きをかけるのが現場の臨場感であり、その臨場感をキャッチするためには現場にどんどん出て行くことである。臨場感を知らずしていかなる創造性や、判断力が生まれるというのだろうか。

30年以上も前に私が海外武者修行で再三危ない橋を渡った時代に比べ、いまの世は社会的に「質実剛健」の気風が疎んじられ、何ごとも優しく石橋を叩いて渡る風潮がある。しかし、その軟弱で優しい教育の結果は学級崩壊、父権喪失、自己本位、少年犯罪等、問題だらけで世の中が軋んできたのではないだろうか。いま日本の教育は大きな曲がり角にさしかかっている。指導者が教育の本質をはきちがえている。基本的に愛情を持って「厳しく指導する」教育の原点や、「礼儀」「躰」「自立心」などの基本的な心がまえを教えることがないがしろにされ、こどものみならず大人までを甘やかす「過保護」と「人頼み」、「無関心」、「無責任」、「自由放任」ばかりが目立っている。その点私の勧める「海外武者修行」

は、「過保護」とは全く無縁のものである。言っておきたいが、いまや世界中どこを探しても安全なところなどありゃしない。自分で道を切り開かなければ誰も助けてはくれない。このことを否が応でも知ることになるのが、臨場感を肌で感じる事が出来る海外武者修行なのである。

知識ばかりを身に付けた挙句、理屈ばかり言って行動せず責任を回避するような姑息な会社人間‘現場の役立たず人間’ばかりになっては企業の将来の発展のみならず、社会の明るい展望も期待出来ない。臨場体験に富み、難題に直面しても動じない骨太な人間こそが、21世紀の実社会を逞しくリードして行く事が出来るものと信じている。そのような明日の人材育成のためにも若いうちにぜひ積極的にひとりで未知の国々を訪れ、臨場感に触れ、感性と創造性、そして逞しい行動力と決断力を培って欲しいと切に願っている。

完